

赤提灯山に乗り込む

某月某日

ヤヤ？ これは何処かで見掛けたようなタイトルであるナ。左様、賢明な諸兄姉は既にお気付きの通り、昭和時代前半の無頼派作家・坂口安吾の作品『淫者山に乗り込む』に倣ったものである。淫者山などという山がある訳ではなく、「淫者、山に乗り込む」という内容の小説である。

赤提灯山などという山も聞いたこともないが、赤提灯山・裏銀座コース、藪提灯山・花魁コース、畦提灯山・夜鷹コース、狐ノ提灯山・嫁入りコースなどがあっても面白いのではなかろうか。奥深い山中の登山道の横丁に赤提灯が並んでいるのもこれまた一興であろう。重いアルコールを担ぎ上げなくて済むだけでも助かるというもの。淫者とか赤提灯とか言えば、真面目な登山愛好家は眉をひそめられるかもしれないが・・・。

例えば、穂高連峰の屏風岩・青白ハング緑ルート of オーバーハングに、ヨセミテのビッグウォールなどで使うポータレッジ（簡易ベッド用のハンモック）をぶら下げて、客はそれぞれセルフビレーをセットして止まり木に止まるという趣向は如何であろうか。スクリュードライバーやソルティープリーズやドライマティニなどのカクテルの香が岩壁を流れるというのも悪くない。隣にクライミングに嵌まり込んだカワイイ子ちゃんでも座ってくれれば、これはもう雲上の天国となろう。

太宰治や三島由紀夫が通った敏座のバー「ルパン」や堀田善衛が通った新宿のバー「ナルシス」などという洒落た名前を付ければ一層品格が増すのではなかろうか。イヤイヤ、ここはやはり日本有数の岩場に敬意を表して、「岩燕亭（イワツバメ亭）」などと名付けるのが良いのではあるまいか。

閑話休題、さて。

赤提灯の話題になったので、巷の赤提灯のことも記しておこう。会社が新橋にあったので、新橋の呑み屋には繁々と通ったものだった。俗に新橋界隈の呑み屋は2千軒とも3千軒とも言われている。会社を出て新橋駅に辿り着く道は呑み屋街の裏路地ばかりで、まともに駅に直行したタメシがない。小生が通っていた呑み屋は手の指だけでは足りず足の指にもご出馬を願わなければならない程の数であったが、その全てが狭くて汚い安赤提灯ばかりであった。大將か女將が一人でやっているような、10人も入れば満杯になるような店ばかりであった。今はその殆ど全部が大將や女將の寄る歳波や、地上げなどで閉店してしまった。地上げされた後のビルに出来たのは若者向けの全国区のチェーン店ばかりで、昔日の俤は無い。

そこで、昔よく通っていた店の2、3を書き留めておきたい。旧桜田小学校の近くに「作州」という店があった。オヤジが作州（岡山県の北部）の出身で、同郷の馴染みもあって通い始めた。汚くて料理も美味くはなかったが、このオヤジは呑み屋のオヤジに似ず真面目な憂国の士で、岡山県出身の政治家故平沼騏一郎代議士（平沼赳夫現衆議院議員の父君）や故橋本龍伍代議士（橋本龍太郎の父君）のファンだった。正義に燃えた熱血漢で、今の政治家はなっとらんと語っていたものだった。独りで立ち寄った時にはオヤジを相手に飲んで故郷のことを語ったりした。この店もいつの間にか閉店してしまった。

古い方の新橋ビルの地下には「苔屋」という狭い天麩羅屋の呑み屋があった。会社がお台場の先のテレコム・センターに移転してからは、「ゆりかもめ」からJR新橋駅に乗り換える地下道の途上にあったので、毎晩のように立ち寄った。オヤジと奥さんが二人でやっている赤提灯で、かき揚げは天下一品の味であった。オヤジは東京から京都の同志社大学に進学して映画村の太秦に通っているうちに、女優見習いであった奥さんと恋愛結婚したらしい。自称アマチュア写真家と言っていた。奥さんは真正正銘の日本舞踊の名取であった。オヤジは文学が好きで、よく小説の話などをしたものだ。同世代でもあって、ウマも合った。客は殆どが常連ばかりであった。ここには独りで来るのが常で、まあ、小生の世俗を離れた癒しの場所でもあった訳である。残念ながら、オヤジがガンで鬼籍に入り、閉店を余儀な

くされたしまった。

今でも残っているのは、日本競馬会ビルの隣にある「杯増」である。誠に狭くて汚い店で、オカアサン1人でやっている店だから、オカアサンは料理を作るのに大忙しで、酒は客が勝手に取り出す習慣になっている。料理は家庭料理で、野菜の煮物や魚の煮つけなど種類も少ないが、味はその辺のウン万円の高級料亭に負けない。関西出身のオカアサンは愛想も悪い方で、始終俎に向かっていて客の相手をすることもない。独りで行った時などは身を持て余すこともあるが、黙って吞んでいても何となく心が落ち着いてくるから妙なものだ。やはりオカアサンの人徳のなせる技であろう。彼女も相当歳取ってきたが、細々ながらも孤軍奮闘しているのは頼もしい限りである。いつまでも続くことを願わずにはおられない。

淫者山から赤提灯山になり、更にとりとめもない巷の呑み屋の話になってしまった。乞ご容赦。機会があれば、愛想の悪い「杯増」にお立ち寄り下さることを。

(2006年1月、母親介護のために滞在中の岡山県の実家にて)

※後記 「杯増」も時代の波には勝てず、この後すぐに廃業した。

[「夢幻の山旅 私の机上登山」目次へ戻る](#)